
冬過春来

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬過春来

【Nコード】

N7214D

【作者名】

都神紗茅

【あらすじ】

組織壊滅後の設定で、カップリングは新蘭です。ちょうど今くらいの季節が舞台になっています。ちなみにこの作品の題名は造語です。意味は漢字そのままです。《冬が過ぎて春が来る》とってくださいれば幸いです。

冬は、もう去ろうとしている。普段と変わりなく毎日を通じている人々は、はつきりとその前触れを感じるようになっていた。今、とある公園内にある木製の長椅子に座っている少女も、春の訪れを全身で感じているうちの一人である。彼女は微動だにせず、視界に映る景色を眺めていた。

「早く咲けばいいのに」

彼女は、柔らかな微笑みを浮かべながらそれだけつぶやいた。

そんな彼女の視線の先には、春になれば薄紅色の衣装をまとう一本の木がある。それはその公園内に植えられている同じものの中でも、一番控えめに存在を主張していた。特にこの木の数メートル先には公園内で最も有名な大木たいぼくがあるために、余計に目立たなかった。それでもその目立たない木は、彼女にとって大切なものの一つであった。

「蘭」

後ろから声をかけられて、彼女　蘭は、勿体もったいぶるようにゆっくりと振り返った。ずっと聞きたかった声であり、思考に浸っていたところで急に話しかけられたこともあったからだ。声の主の姿を実際に目にすると、蘭の微笑みはいっそう柔らかくなった。

「新一」

「悪い！ ちょっと昨日は」

「遅くまで推理小説を読んで寝坊した、とか？ 待ち合わせの時間から一時間半も経ってるわよ？」

両手を合わせて本当に申し訳なさそうに謝る新一に、蘭はすぐにそう言った。彼女にとって彼と会いたかったと言うのは紛れもない真実である。そのこともあって、最初に彼女は遅刻の理由を訊ねる言葉を口にしたのだ。

思いもがけず急に現れた言葉に一瞬ひるんだ新一の元へ、蘭は長椅子から立ち上がって向かう。

「ま、まあな」

彼は合わせていた両手のうち右手だけを頬にやって、ぼりぼりと掻きながらためらいがちにそう言った。別に開き直っていると言っわけではない。そのことを知ってか知らずか、蘭は歩みを止めないまますぐに反応をした。

「もう、新一はどれだけわたしを待たせれば済むの？」

「……いじめん」

蘭のとどめの一言に、新一はついに黙り込んだ。

彼は今まで、幾度となく彼女を待たせていた。しかし、つい最近にそれはやっと終わりを告げた。もう二度とそんなことをしないと彼女に誓ったばかりでもあった。そんな矢先のことであるから、彼は何も言わずただその場に立っていることしかできなかった。

そんな新一までメール弱まで近づいてきて、蘭はぴたりと歩みを止めた。それからしばらく間を置いて、また笑顔に戻った。

「ちょっとしたクイズみたいなものんだけど、当ててみてくれる？ 探偵さん。どうして、わたしがあえてここを待ち合わせ場所にしたか」

「え？ 二こつて、公園のことか？」

「ううん。分かりやすいあっちの大きな木じゃなくて、どうしてこの小さい木の近くに待ち合わせることにしたかってこと」

遅刻から話題が急に転換したことにまだ驚きつつも、新一はすぐその質問の答えを考え始めた。この切り替えが素早いのはやはり日頃の訓練の賜物たまものだった。それでも、さすがに肝心の解答までにはたどり着けなかった。

「ブブー。時間切れ」

「あのなあ。んな短みじえ時間じゃ分かんねえって」

そんな新一に、蘭はなぞなぞ遊びをしている子供のように笑う。そんな彼女に悔しがりつつも、彼はその感情を越えて思わず笑みをこぼした。

「正解は、ここがわたしの思い出の場所だから」

「思い出の場所？」

そうだよと言った蘭に、新一は自らの記憶をたどっていった。この木ではないといけなかった理由に繋がる、思い出を探すために。しかし、案外それは簡単に見つかった。

「それって、オレと蘭が初めて二人でここに来た時のことか？」

「うん。でも、あの時はここを目指してたんじゃないかって、偶然見つけたって感じだったよね」

それは約十年前、新一と蘭が小学校に入学して間もないある休日のことであった。

その頃から好奇心旺盛あつせいだった新一に連れられ、蘭は彼と一緒に町内を探検したのだ。幼い頃の彼らにとって、町内はとても広いまだまだ知らないことだらけの世界であった。

結局、途中で道が分からなくなってしまい、どうしようと悩んでいたところに着いたのがこの公園だった。今度はこの中を探検しよ

うと言い出した新一に蘭は泣き出したいのをおさえつつ、ついていた。

「そうやって公園の中をうろろろしてる時に、この木を新一が見つけたんだよね」

目の前に立っている木を見ながら、蘭は懐かしげにそう言った。二人は十年前の話をしながら、どちらともなく自然と長椅子へと向かっていった。そして、そこに隣同士で座った。実はその十年前にも、同じ並び方で座っていた。二人は何気なく行動したため、そのことには気づいていない。

「そうだったな。でも、なんでそんなぐらいのことが思い出なんだ？」

「……覚えてないの？ 新一、わたしに言ったじゃない」

「？」

蘭は一呼吸置くと、静かに言った。

「あつちのでかいきよりもこっちのほうがいいよな。だってさ、いつかあのでかいきにおいついてやるってがんばってるみてえだもん。らんもそうおもうよな？ って感じだったと思う。はっきりとは覚えてないけど」

「そう、か」

新一は自分のことにも関わらず、まるで他人の話に相づちを打つかのようにそれだけ言った。そして蘭と同じく、その木に焦点を合わせた。

ずっと見ていると言えども、その木に何か変化が現れるわけではない。一時の沈黙が流れたあと、新一が先に口を開いた。

「今度、桜が咲いた時にまたここに来ようぜ。絶対、あつちのでかい木より綺麗に咲いてるはずだから」

「うん。新一が、待ち合わせの時間を守ってくれればね」

「ああ。もう二度とオメーを待たせないって言ったからな。今度こそ　これからも、ちゃんと守る」

その言葉を聞いて、蘭は思わず顔ごと言葉の主に向けた。その視線に気づき、彼もゆっくりと横を向いた。

蘭は今もまた、笑っていた。さっきよりも幸せそうな表情だと、一目見ただけで新一は分かった。自分が全くうぬぼれていると言っわけでもない。これからもずっと、こんな彼女を近くで見たい。そんな思いも生まれた。

二人はお互いに顔を近づけ、そして　その影が重なった時、今年初めての春一番が吹いた。

(後書き)

この作品、実は今日思いついて一気に書き上げました。

今日がまさに『全身で春を感じた日』だったことと、それに加えて
ニユースで『春一番』と言う単語を聞いたからでした。そして、最
近は主題+恋愛と言う傾向の作品ばかり書いているつもりだったの
で、たまには恋愛オンリーで書いてみようとも決めました。

そのためかどうかは分かりませんが、短編にしてはやたらと長くな
ってしまい……突っ込みどころ等々あると思います。

あと一つ。

私はやはり、直接的な恋愛描写が関わってくる作品を書くのは苦手
だと分かりました(^^;)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7214d/>

冬過春来

2011年2月2日02時52分発行